

ばすてる

- ・夫婦共にささえ愛
- ・「夫婦」っていいな



蓮田市男女共生情報紙
第3号 2001.11

インフォメーション

問合せ ☎048-768-3111 内線278

「ビデオテープ」貸出し

- ・21世紀はみんなが主役 23分
- ・男女共同参画社会基本法のあらまし
- ・ドメスティック・バイオレンス(DV) 25分
- ・家庭内における女性と子どもへの影響
- ・どうして私を殴るのですか 25分
- ・妻や恋人への暴力は犯罪です



個人・団体に貸出して
います。

問合せ
市民が主役推進課

講演会のご案内

市民の皆さんに参加していただいている「コミュニティ・男女共同参画づくり講演会」ですが、平成13年度は、来年1月27日(日)に行います。講師は東京家政大学教授の樋口恵子氏です。「生き生きと輝く明日のために」と題し講演していただきます。詳しいことが決まりましたら、「広報はすだ12月号」でお知らせします。



東京家政大学教授
樋口恵子氏

グループ紹介 華道連盟

華道連盟は、昭和54年に創立、会員は80人です。春は花と緑の祭典、秋は文化祭で華展を開催など交流の輪を広げた充実した会です。多くの方々には好評をいただいています。

また、市役所市民ホールや中央公民館において毎週、先生方が交替で華を活けています。飾る場所での調和が心に安らぎを与えています。各流派とも技術向上に励むと共に、地域の皆さまへお役に立てることを念願しています。

会長 田井初枝



ボランティア編集員募集

情報紙「ばすてる」を
いっしょに
つくりませんか

市では、平成11年から男女共同参画社会の実現に向けて、年1回市民参加によるボランティア編集員さんが、企画・編集し発行しています。平成14年度ご協力いただけるかたを募集します。

- 募集人数 8名以内(性別不問)
- 対象 男女共同参画に関心のある市内在住のかたで、情報紙の編集に興味がありご協力いただけるかたです。
- 任期 1年
- 応募方法 電話お待ちしております。
「申込書」を郵送させていただきます。
- 問合せ 市民が主役推進課
女性政策担当



用語解説 リプロダクティブ・ヘルス/ライツ (性と生殖に関する健康/権利)

女性の人権の重要なひとつとして認識されるにいたっています。いつ何人子どもを産むか生まないかを選ぶ自由、安全で満足のいく性生活や安全な妊娠・出産、子どもが望まれて健康に生まれ育つことが含まれています。ひとりの人間として、からだの性と生殖に関することについて、女性自身が自己決定を行うという考えかたです。

編集後記

ある民間の調査会社によると、主婦が解放されたい第一位は「家事」、第二位「ローンなどの返済」そしてなんと第三位に「夫」が入っていたそうである。「夫」から解放されたい主婦の半数は50歳代の専業主婦とのこと。今回の特集を通して、夫婦の危機は、50歳代にあると実感。人生50年は、もう二昔も前の話。長い人生、お互いの気持ちいっまでも大切にしたいですね。

編集員

- 須賀美千代/佐藤 浩子
- 斎藤レイコ/榎本 裕子
- 竹野谷美紀/佐藤 知信
- 北川 育子

「ばすてる」ってなあに?

子どもの頃から女はピンク、男はブルーと従来の固定概念にとらわれてしまっていることが多いようです。男女が性別にこだわらず自由に好きな色を選び、柔軟な発想ができることを理想としていきたいと願い、柔らかい中間色という意の「ばすてる」としました。

発行/蓮田市役所市民経済部市民が主役推進課 〒349-0193 蓮田市大字黒浜2799-1 ☎048-768-3111 内線278

R100 古紙配合100%再生紙を使用しています

夫婦の愛情度をチェック!

今回のアンケート調査の質問項目の一部をご紹介します。皆さんもぜひチェックしてみてください。思わぬ自分の気持ちに気づくかもしれません。なお、アンケート実施にあたっては、国立精神・神経センターの菅原ますみ先生に貴重なご助言をいただきました。

問1 現在、夫(妻)に対してどのような気持ちをお持ちですか。以下の項目について、①まったくあてはまらない、②あてはまらない、③ややあてはまらない、④どちらでもない、⑤ややあてはまる、⑥あてはまる、⑦よくあてはまる、のいずれかに○をつけてください。

- ① 1 どんなことがあっても夫(妻)の味方でありたい
- ② 2 夫(妻)を一人の人間として深く尊敬している
- ③ 3 夫(妻)が幸せになるのが私の最大の関心事だ
- ④ 4 夫(妻)は言葉に出さなくても私の気持ちを理解してくれる
- ⑤ 5 夫(妻)のことならどんなことでも許せる
- ⑥ 6 夫(妻)のためなら何でもしてあげるつもりだ
- ⑦ 7 夫(妻)は魅力的な男性(女性)だと思う
- ⑧ 8 夫(妻)と一緒にいると、夫(妻)を本当に愛していることを実感する
- ⑨ 9 夫(妻)と私はお互いに出会うためにこの世に生まれてきたような気がする
- ⑩ 10 夫(妻)とはいまでも恋人同士のよう気がする

問2 次のなかで、あなたが夫(妻)と一緒にするもの、また、その活動をするとき夫婦でどれくらい意見が一致しますか。①大体一致する、②時々一致する、③あまり一致しない、④まったく一致しない、のいずれかに○をつけてください。

- ① 1 夫婦で楽しむ趣味は、意見は
- ② 2 夫婦だけの外出は、意見は
- ③ 3 子育てについての話し合いは、意見は
- ④ 4 家計についての話し合いは、意見は
- ⑤ 5 自分自身の悩みについての話し合いは、意見は

問3 結婚当初の配偶者への愛情を100としたとき、現在の愛情度合いはどれくらいですか。(具体的な数字を記入)

問4 夫(妻)とのこれまでの生活や現在の生活をふりかえってみて満足のいく生活でしたか。①ひどく不幸、②不幸、③どちらかという不幸、④どちらでもない、⑤どちらかという幸福、⑥幸福、⑦完全に幸福、のいずれかに○をつけてください。

問5 あなたは、「夫(妻)と結婚しなければよかった」と思うことがありますか。

- ① 1 いつも思っている
- ② 2 たまに思う
- ③ 3 時々思う
- ④ 4 まったく思わない

問6 もし、もう一度結婚できるとしたら?

- ① 1 今の夫(妻)と結婚する
- ② 2 他の人と結婚する
- ③ 3 もう結婚しない

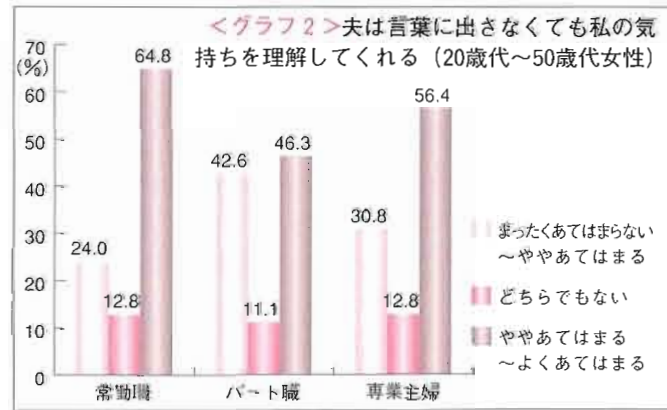
特集

夫婦共にささえ

～よりよいパートナーとして夫婦のあり方を見つめ直してみよう～



だれもが感激を胸に迎えた結婚式。周囲の祝福を受ける中、二人は変わらぬ愛を誓い合ったことでしょう。あれから時が流れ、結婚生活の歴史を刻んでいく間に、お互いに対する思いはどのように変化していったのでしょうか。夫婦の希薄化やコミュニケーション不足が問題視され、「熟年離婚」も増加しているといえます。この機会に、夫婦で「夫婦のあり方」を見つめ直してみませんか。



冷

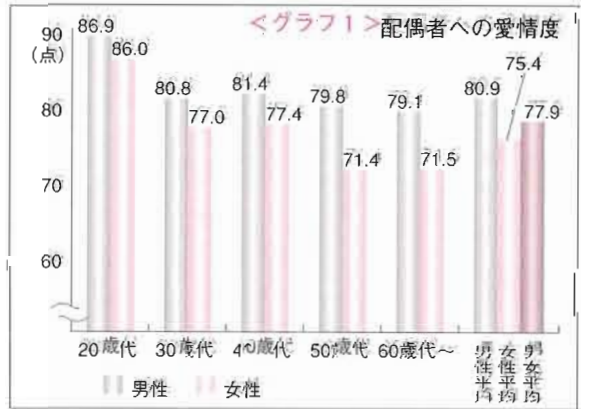
めていく妻と変わらぬ夫の愛情

多くの場合、結婚はお互いの恋愛感情からスタートします。ところが、子どもが生まれ、時が経つうちに互いに相手への愛情も薄れて…。昨年の離婚件数は約26万件。最近では中高年の離婚が増加しているようです。夫婦はどうしてすれ違い、心が離れていってしまうのでしょうか。

そこで、今回は「妻のキモチ、夫のココロ」をテーマに、504名(20歳代～70歳代の既婚の男女)の市民の皆さんにアンケートにご協力いただき、その結果を中心に、「夫婦のあり方」について考えてみました。

アンケートの結果からは、こんな夫婦の関係が見えてきました。「結婚当初を100とした際の配偶者への愛情度」(グラフ1)を年代別に比較すると、男性の変化は緩やかなのに対し、女性は年齢とともに急速に低下していきまます。その他の項目も全般的に男性の方が妻への愛情、結婚生活についての満足度が高く、夫婦の気持ちにズレのあることがわかりました。

たとえば、「夫(妻)が妻(夫)に対してどのような気持ちを持っているか」(アンケート問1全問)「夫婦の愛情関係」を問う質問においては、20歳代の女性の47%が「夫を一人の人間として深く尊敬している」と答えたのに対し、30



働

き方で妻の「ココロ」も変わる

また「夫は言葉に出さなくても私の気持ちを理解してくれる」という質問を、妻の就業形態から分析すると、「学校を卒業してからずっと常勤職」(以下、「常勤職」という)では64%が「ややあてはまる」よくあてはまる」と答え、「子どもが生まれてから一度も仕事に

夫の家事・育児参加と妻の気持ちの関係は?

さらに細かく分析すると、夫の家事・育児の貢献度が、妻が感じる結婚生活への幸福感等に影響を与えていることがわかりました。夫婦で家事を分担した女性の約92%が「どちらかとい

ついたことはない」(以下、「専業主婦」という)では56%、「一時仕事をやめて家にいたが今はパートなどの非常勤職」(以下、「パート職」という)では46%となっています。

愛情に関する質問以外に、夫婦で行う共同活動の頻度を問う質問においても同様に、一番夫婦関係がよいのは「常勤職」、ついで「専業主婦」、数値が最も低いのは「パート職」の女性という興味深い結果となりました。

「常勤職」の妻の家庭では、家事は夫婦分担で、「専業主婦」の場合はすべて妻が引き受けるというように、結婚当初からその役割分担がなされていると思われまます。しかし、途中から「パート職」となった女性は、家事をこなしながら仕事もするといったケースが多く、夫に対して不満が募っていることが想像されます。加えて、「パート職」の女性は、夫婦と一緒に楽しむ趣味や外出も少ないことから、夫婦で共有する時間やコミュニケーションが不足しており、夫への愛情度が低いのはその結果といえるのではないのでしょうか。

ドメスティック・バイオレンス(DV)

を知ってまますか?

夫が妻に暴力をふるうとき

暴力をふるう夫は特別な存在ではない

埼玉県が平成12年度に実施した「男女共同参画に関する意識・実態調査」主要テーマ「女性に対する暴力」によれば、「ドメスティック・バイオレンス」について知っている人は約6割、しかしながらその内容を知っている人は約3割にすぎません。

ドメスティック・バイオレンス(以下、DVという)とは、夫や恋人など親密な関係にある男性が女



性に対してふるう暴力のことをいいます。夫の妻への暴力は家庭内の出来事だけに表面化することもなく、また、警察も「民事不介入」という原則から問題にされないことが多くありました。しかし、DVは、女性の心身を傷つける許されない人権侵害行為であり、犯罪なのです。

では、DVの実態とはどのようなものなのでしょうか。埼玉県婦人相談センター専門調査員の高倉富美子さんによれば、平成12年度の相談件数は6155件に達し、近年増加傾向にあるそうです。

「夫の暴力は昔から存在する根の深い問題です。暴力をふるう男性は年齢・学歴・職業等に関係はありません。社会的に信用のある、ごく普通に暮らしている人が家庭では妻に暴力をふるう。それだけに周りからは見えにくく、女性がだれかに相談しても「あなたにも落ち度があるのでは」などと言われてしまいがちです」(高倉)

暴力は身体的、精神的、性的と形態はさまざま

ひと口に暴力といっても、その形態はさまざまです。殴る・蹴るといった身体的暴力、何を言っても無視するといった精神的暴力、性的な行為を強要するといった性的暴力など、いずれの場合も力の強い者が弱い者に対する支配の道具として暴力が存在するのです。

「暴力をふるわれている女性は、「自分が悪いのではないか」といったように自分に自信がもてなくなっています。また、社会的に孤立しがちです」(高倉)

暴力を見て育つ子どもの将来は?

こうした家庭環境で育つ子どもたちには、どのような影響があるのでしょうか。

「夫が子どもに対して暴力をふるう例もあります。また、子どもは目の前でお母さんが殴られているのを見ていますから、自分はお母さんを助けてあげられないダメな子どもだと思うんです。それが、思春期になると逆にお母さんはいいつも殴られていて情けない人間だと感

相談を受けたらじっくりと話を聞く

では、もし暴力を受けて悩んでいる人を見かけたら、私たちはどのような援助をしたらよいのでしょうか。

「本人が少しでも暴力をふるわれているという素振りを見せたら、「何かあったの、大丈夫?」と声をかけてください。そのとき、「逃げなさいよ」とか「別れば」といった否定的な言葉を使わずに、いつか肯定的な言葉を使ってください。何よりもじっくりと話を聞いて、市役所・福祉保健総合センター等の公的機関へ相談することをアドバイスしてもらえればと思います」(高倉)

DVは犯罪行為であり、暴力のない社会をめざすには、私たち一人ひとりが暴力を許さないという強い意識をもつことが大切なのではないでしょうか。

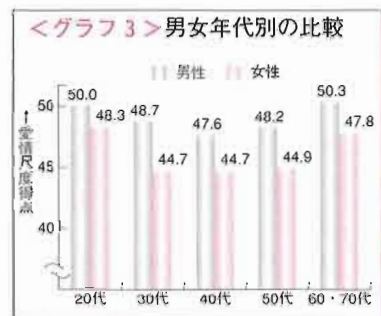
夫婦の愛情関係について

国立精神・神経センター精神保健研究所
家族精神保健部家族・地域研究室長

菅原 ますみ

現代の結婚は、その9割以上が恋愛結婚の形態をとっている。大多数の日本の夫婦は、そのスタートには男女間の恋愛関係が存在しているといえよう。では、結婚当初の恋愛感情を中核とする夫婦の愛情関係は、男女や年代でどのように変化するものなのだろうか。今回のアンケートで質問した「夫婦の愛情関係尺度(アンケート問1全問)の得点を、年代別(男

女)と比較してみると(グラフ3)、男性は緩やかなU字型を描いているように見えるが、各年代の得点には統計学的に有意な差はなく、一貫して女性より高い水準で推移している。一方、女性は、30歳代で急速に低下しそのまま40歳代、50歳代と低い水準となっている。60歳代、70歳代でまた上昇しているが、この経過が経年的変化なのか年代的な違いなのかは、残念ながら



がら今回の調査ではわからない。現在の30歳代~50歳代の女性が60歳代、70歳代になったときに、夫に対する愛情が回復するかどうかは、今後の調査や研究で確かめていく必要があるだろう。

グラフ4にみるように、夫の子育て協力度が高いほど妻の夫に対する愛情は深いものになっている。思い当たるご家庭では、ぜひ、今夜にもよく話し合ってみてはいかがだろうか。長い人生、お互いを愛しつづけて過ごすためにも、子育てや家事をめぐる夫婦の気持ちのすれ違いは、早い時期に解消しておくことが大切だろう。

プロフィール すがわら ますみ



東京都立大学大学院人文科学研究科満期退学。文学博士。専攻は発達心理学で、子どものパーソナリティの発達と家族関係との関連をテーマとしている。

うと幸福(完全に幸福)としているのに対し、「専ら妻が家事」とした女性は「夫と結婚しなければよかった」とも「時々・たまに思う」が約82%であるのに対して、「夫婦で育児」とした女性は47%にとどまります。この結果は、特に忙しい子育て期の30歳代の女性に顕著に表れました。

一方、男性の側から家事・育児とのかわり方と結婚生活の満足感等との関係を考察してみると、女性ほどその相関関係ははっきりしません。家事・育児への貢献度が高い夫も低い夫も、同様に女性より幸福感が強く、今のパートナーや結婚への不満は少ないようです。

男性は、夫の家事・育児への協力度が妻の気持ちにどのような影響を及ぼしているのか気づいていないのかもしれない。家庭生活は、妻と夫が協力してこそ、初めて成り立つものではないでしょうか。

しかし、現実には男性が日常的に家事・育児に参加することは難しい状況にあります。「厳しい時世で、サービス残業は増えるばかり。疲れた夫に家のことをしてと言いつらい。労働時間の短縮等、社会システムを真剣に見直す時期にきているのでは(30歳代女性)」。

一方では、「生れながらの性差を理解しなうで、お互いに思いやりの気持ちをもって協力していけたら。家庭で夫婦が協力する姿を子どもに見せること

が、将来の変革につながるはず(40歳代男性)」という意見も寄せられました。

夫婦で生活を見直し「共に過ごすとき」を

それでは、子どもたちも独立し、再び二人だけの生活に戻った60歳代以上の夫婦は、お互いの関係をどのように感じているのでしょうか。「夫は家事を手伝ってくれるようになった」「思いやりや気遣いが見られるようになった」という意見が大半をしめるように、妻の愛は回復してきているようです。生活や時間にゆとりができることで、夫婦共通の趣味を持ちたり、外出の機会が増えるなど、多くの時間を共有できることが幸福感を高めている原因かもしれません。

このように、趣味や外出、話し合いのほか、家事や育児などの役割分担を含めた夫婦の共同活動を通して、お互いのコミュニケーションを図ることが大切なのではないのでしょうか。

◆◆◆◆◆

夫婦の形は、それぞれ異なります。「ウチは大丈夫」「そう思っているあなたも、夫婦で「愛情度チェック」をされると、案外お互いの愛情に温度差を感じるかもしれません。

まずは、コミュニケーションを大切に、パートナーの気持ちや状況と向き合うことから始めてみませんか。

いま、ときめいて
さわやかカップル登場!

「夫婦」っていいな

家事も育児も自然体 できる方ができることをする

鈴木敏夫さん・早苗さんご夫妻（黒浜在住）

結婚4年目の鈴木さんご夫妻は、会社員の敏夫さん、看護婦の早苗さん、保育園に通う琴乃ちゃん（3歳）の3人家族。早苗さんは夜勤も月8回程度あるなど、不規則な勤務態勢のなかで働いています。

そこで、保育園の送迎は主に敏夫さんの役目に。また、夜勤の日は夕食を作り、琴乃ちゃんの世話をするなど家事・育児を引き受けています。

「本音を言えば、家事や育児を面倒だと思うこともあります。でも、妻は本当に看護婦の仕事が好きだし、頑張っているのも知っています。だから、育児で仕事を諦めてほしくないし、家のことでできることは自分がして、妻にも自分の人生を大切にしてほしいと思っています」と、敏夫さんは言います。

一方、早苗さんは、「小さい子どもを保育園に預けて働くことに心が痛むこともあります。一番つらかったのは、子どもが入院して、“看護婦なのに、どうして自分の子



とびきりの笑顔がトレードマークの早苗さん。敏夫さんは甘いパパ

どもの具合の悪さに気づかなかったの”と周りから言われたときです。それはショックで、仕事を辞めることも考えました。でも、勤務先の婦長さんが“子どもには、子どもの人生がある”と言ってくれたその言葉が私の支えになっています。また、“男だから”と構えずに、家事も子育ても自然体でこなしてくれる夫には、感謝とともに尊敬もしています」と笑顔で話してくれました。

これからもお互いを尊重しあい、よりよい人生を歩んでいきたいと語る笑顔いっぱいのご夫婦に感激!

家庭で父親が変わることが 男女共生のキーワード

飯野和之さん・恵美子さんご夫妻（東在住）

一番上のお子さんの入学とともにPTA役員となって9年目という和之さん。現在は会長職を退き顧問に就任、また、「おやじの会」事務局として活動しています。「地域とのかかわりを求めて集まった父親たちが、学校行事の手伝いや自ら企画したイベントを楽しんでいま



夫婦そろってより積極的に地域活動に携わっていきたいですね

す」。母親たちばかりのPTA。父親がかかわる時間が必要だと「おやじの会」を立ち上げたのが今年の5月。募集して蓋を開けてみたらサラリーマンのお父さんばかり、もちろん活動は土日が中心になります。何といても問題提起から活動に至るまでが早いことが自慢のひとつ。

「子どもが卒業してもOBとして残る人もいますよ。お父さんパワーとして、地域活動にも影響を与えたいですね」と、夢は膨らみます。

一方、PTA以外にも地域活動に飛び回る和之さんを支える妻の恵美子さん。PTAでは、和之さんほど前面に出る場はありませんが、最近、店舗を任せられ、家を守るだけだったのが社会に一步出た形になりました。

「家の中にはわからなかったことですが、人とふれあうことはとても楽しいですし、生活にもハリが出ました」と、笑顔で話す恵美子さんです。

忙しい夫婦の姿をお子さんたちも見ていて、自然に家族の間に役割分担ができたとか。「相手を思いやるのが男女共生社会でのキーワードでしょうか。まず、家庭で父親が変わらなくちゃね」という和之さんの言葉に、多くのお父さんも見習ってほしいなど実感。

天涯二人きり。お互いを大切に しながら妻の介護を楽しみたい

久保田雅巳さん・とみ子さんご夫妻（綾瀬在住）

「子どものころは健康優良児として文部大臣賞を受けたこともあり、結婚後もテニスやボランティア活動をするなど健康には自信があったのですが…」と語るとみ子さん。3年前に発病し、現在は要介護4の認定を受けています。そんなとみ子さんを心身ともに支えているのが、



無理をせず、気を強くもってこのまま年月を重ねていきたいです

愛は国境を越える！ 夫を信じ台湾から日本へ

野本和貴さん・麗子さんご夫妻（黒浜在住）

現在は日本国籍を取得されている麗子さんの故郷は台湾。和貴さんとは、台北の大学で出会ったそうです。

「当時、僕はまだ大学生で、交換留学生として台北の大学へ入学したんです。妻も学生で、お互いに言葉もよく理解できないんですが、気がついたら結婚を決めました」と和貴さんが照れ臭そうに話してくれました。

出会って半年で結婚を決意したものの、周囲の理解を得ることができませんでした。麗子さんに不安はなかったのでしょうか。

「不安がなかったといえば嘘になりますが、夫の愛情を信じていたし、若かったから困難があっても乗り越えられると思っていました」と麗子さんは語ります。

「周囲の了解がありませんでしたが、僕が幸せになることが、ひいては両親の幸せにつながるのではないかと考えていたので、結婚を諦めるつもりはまったくなかったです」と和貴さん。そんな和貴さんだからこそ、麗子

「夫婦のあり方」にもそれぞれ違った形があるのは当然のこと。育児・教育に追われる世代、子育てから解放され地域活動に積極的に参加している世代、年輪を重ね夫婦二人の生活を大切にしている世代など、強い絆で結ばれたカップルにその思いを語っていただきました。

夫の雅巳さんです。

「私は高度成長期の会社人間で75歳まで働いていました。その間に1カ月ほど入院を体験し、介護される人、する人の気持ちを理解しているつもりでしたが、実際に介護してみると意外と大変なものだと実感しています。ただ、私自身も要介護1の認定を受けているうえに、年齢とともに体力的・精神的な面では介護が負担になってきたので、公的サービスを積極的に利用したり、近隣の方に励まされて毎日を暮らしています」。ときには、雅巳さんがのんびりできるようにと、とみさんはショートステイを利用します。

「最初は、不安だったのですが、このままではお互いに疲れてしまうと思って入園することにしたんです。お互いに頼りすぎたり、過保護になると、やさしい介護はできませんからね」と、とみさんは言います。

「女性の社会的責任もしいに重くなっていますが、それは男性も家事・育児・介護などの家庭生活の責任を担わなければならない、ということではないでしょうか。特に地域とのかかわりは、日々の積み重ねによってつくられることに、妻の介護を通して気づきました」と語る雅巳さんの穏やかな表情がとても素敵でした。

さんも信じることでできたのではないのでしょうか。

「日本と台湾では文化も習慣も違います。頼る人もいない日本での生活にはそれなりの苦労もあったと思いますが、妻は何事にも前向きです。家事や子育てと家庭のことは任せきりです」と和貴さん。

私たちは、国際結婚を何か特別なものと考えがちです。でも、人と人が出会い、愛情を育むことに国籍や人種は無関係なはず。夫婦にとって大切なことは愛情と信頼であることを、改めて感じさせてくれたお二人でした。



リタイア後は、半年ごとに台湾と日本で暮らすのが夢